

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

評伝 恒藤 恭六

A Critical Biography of TSUNETO KYO (Part 6)

関 口 安 義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

第八章 ヨーロッパでの研修

一 同志社から京大経済学部へ

同志社大学の法学部は、澁刺とした雰囲気に満ちていた。同僚には後年毎日新聞や産経新聞の主筆を経て早稲田大学の総長になった阿部賢一をはじめ、中島重・今中次磨・山口正太郎・栗生武夫ら、若く元気な人がいて、やがて波多野鼎・住谷悦治らも加わった。恒藤恭六にとって同志社大学は、よき職場であったのだ。彼はひたすら研究に打ち込んだ。その一方で同志社系の同人雑誌『狼烟』の編集顧問も引き受け、同誌創刊号(一九二二・一二)には、「暗夜」という散文詩を載せている。若き日の文学への志向は、法学に転じた後も時折芽吹くのであった。

ところで、彼の同志社時代のことになるが、お手伝いさんの女性に大学教育を受けさせた話があるので記しておこう。そのころ糺の森の彼の家に、佐久間千代という女性が寄寓していた。家事の手伝い(女中)としてである。どのような経緯で、彼の家に来たのかは定かでない。一九二〇(大正九)年のことである。恒藤家では信一・武二の男の子二人が生まれ、なにかと忙しく、人を雇ったのである。千代は当時二十三歳、結婚はしたものの、離婚して恒藤家で働くようになったのである。彼女は聡明で、当時の女性としては珍しいほどしっかりしており、勉強好きであった。二十歳をとうに過ぎていながら向学心に燃え、「同志社大学の講義を聴講したい」と言い出す。恭は妻雅とも相談のうえ、その願いが適うよう何かと尽力している。以下は主として恒藤恭の「ある女性の生涯」(『京都新聞』夕刊一九六六・六・一一)によることを断っておこう。

同志社では先例のないことなので、教授会にかけたところ、中島

重がいち早く賛成したため、異議なく可決されたという。その後千代は、恭が京都大学に転出した後も同志社で聴講を継続し、七年におよんだ。その間に憲法・刑法・商法・民法・行政法・経済原論・社会学・統計学などの講義を聴く。また、文学部の浜田与助教授について哲学を学んでいる。恭がヨーロッパ滞在中も恒藤家にいて同志社に通い、雅のよき話相手にもなっていた。恭のバリからの雅宛ての便りには千代の名が時々登場する。「千代さんによろしく」とか、「千代に山々よろしく」と添えた文面もある。彼女は一九二八（昭和三）年まで、恒藤家の家事の手伝いをしながら同志社に学んだのである。

佐久間千代は恒藤家にいた一九二六（大正一五）年六月号の『改造』に、「苦しみを浴びて」と題した随筆を載せている。感傷的な文章で、フェミニズムの立場からの貧富の差を告発し、無産階級の健全な成長を願った文章である。「生きる為に……生きる為に人間は如何に苦しんでもいゝ。彼は魂を持つてゐる筈だから。彼は創造を持つてゐる筈だから。彼は意志を持つてゐる筈だから？／人間の心臓に深く喰ひ入つた苦しみは学問知識と同等に共に、個々人の、従つて無産階級全体の健全なる成長へのなくてはならぬ肥料である」といった調子の文章は、決してうまいとは言えないが、言いたいことは伝わってくる。

「ある女性の生涯」によると、「苦しみを浴びて」を書いた翌々年の一九二八（昭和三）年、彼女は上京し、当時左翼作家として名を成していた藤森成吉の指導を受けるようになり、次第に実践活動に携わるようになったという。藤森は恭とは一高時代専攻は違つたが、同じ文科にいた仲間であり、前年「何が彼女をさつさせたか」

（『改造』一九二七・一〜四）という、当時流行語にもなつた戯曲を書くなど、著名な労働文学作家になつていた。千代はその名声を慕つて頼つたらしい。

その後、さまざまな経緯を経て、佐久間千代は一九三四（昭和九）年、小樽の大国屋百貨店に女子店員監督として入社。戦後同百貨店の庶務用度課長にまでなり、課長・係長会議の議長として活躍したが、一九六一（昭和三六）年五月十七日に薬物自殺を遂げている。恒藤恭は佐久間千代の死後五年たつて、「ある女性の生涯」を書いたのである。そこには彼女へのレクイエムとともに、婦人の権利問題が意識されていた。折からの女子大生亡国論に対し、戦前にもこのように自立した女性がいたことを語り、女性の存在を軽く見るべきでないことを強く主張している。一方で、婦人の権利のままならなかつたこの国での、目覚めた女性の生き方の容易ではなかつたことを暗に言いたかつたのであろう。大正時代にお手伝い（女中奉公）の一人の女性の学が権利を保証し、相談に応じ、道を開いてやつた恒藤恭の同志社時代の逸話は、この人物を語る上で、それなりの意味をもつ。

一九二二（大正一一）年三月、恒藤恭は同志社大学を辞任し、京都帝国大学経済学部助教授に就任する。京大の経済学部は法科から分離した形で一九一九（大正八）年に誕生したもので、学部は発展途上にあり、有能な人材を求めていたのである。学部長の田島錦治からの交渉を受けて、彼は直ちに決心する。後年この異動に関して恭は、「学究生活の回顧」に、「同志社大学は居心地がよく、別に不満があつたわけではないけれど、何分にも蔵書が至つて不十分であつて、法律、政治、経済などの諸方面の蔵書のゆたかに充実している

ことが、私を京大にひきつけた大いなる魅力であった」と記している。大学院から同志社時代にかけて、法哲学にかかわる論考をいくつも発表していた彼は、先にふれたように、それらを『批判的法律哲学の研究』と題して、一九二二（大正一〇）年十月、京都の内外出版株式会社から刊行していた。その業績が評価されたことになる。

恒藤恭はその年の四月から京大に新しく設けられた経済哲学の講義を担当した。ジンメルの経済哲学を中心に講義をしたという。彼は充実した図書館の書庫を利用し、研究に励める環境をうれしく思った。恵まれた研究条件の中で、著書や論文が次々に生まれるのであった。著書だけを見ても、『国際法及び国際問題』（弘文堂書房、一九二二・一〇）、『ジムメルの経済哲学』（改造社、一九二三・五）、『羅馬法に於ける慣習法の歴史及理論』（弘文堂書房、一九二四・二）、『社会と意志』（弘文堂書房、一九二四・二）などがあり、それに前章でふれた信濃自由大学のテキストに用いたハルムスの『法律哲学概論』の翻訳（大村書店、一九二二・一〇）もある。

二 パリ滞在

一九二四（大正一三）年三月、京都大学経済学部へ転じて二年たった恒藤恭は、ヨーロッパ諸国への留学に旅立つ。前年に「経済哲学研究のために仏蘭西国、英吉利国及び独逸国に満二年間在留を命ずる」の辞令をもらっていたのである。満三十五歳、彼は研究者として充実した時期にあった。この辞令に対して恭は、「実のところは、京大に転任して、充実した書庫を利用し得るようになったし、落ちついて研究に力を注ぎたいと思っていた矢先であったので、留学とい

うことは甚だ不本意であったけれど、何分にも在外研究を命ぜられたことなので、余儀なく準備をととのえて渡欧の途についた次第であった」（『学生生活の回顧』）と記している。その気持ちもわからぬでもない。ようやく著書もまとまりはじめ、研究は軌道に乗った感があった。そうした時期に外国に出かけることは研究に頓挫を来たらずのではないかという懸念が彼にはあったのである。しかし、長い目で見れば、在外研究の名の下での外遊は、視野を広め、国際人としての素養を養うにはもってこいの機会なのである。

当時の帝国大学教官の在外研究は、期間は二年が標準で一年の延長も認められていた。条件は給与の三分の二が留守手当として支給され、あとは文部省の規定による在留費が月々平均四〇〇円位給与され、他に願い出によつては、国から国へ移る場合は、移転旅費も支給されている。しかも、第一次世界大戦後の日本の円は強かったので、一年間の支給額で二年は在留できると言われたほどである。まさに留学生の黄金時代であり、今日から見ると実に恵まれたものであった。それゆえ当時は、ほとんどの研究者がヨーロッパの地を踏んでいる。恒藤恭の仲間に限っても、田村徳治・小栗栖国道・末川博・栗生武夫らは相次いで日本を発つていった。田村と小栗栖は滝川幸辰と共に一九二二（大正一一）年のはじめに日本を発ち、ドイツへ向かった。また末川博は同年夏にアメリカへ渡つている。東北帝国大学に赴任していた栗生武夫も一九二三（大正一二）年にドイツに渡つていった。恭も遅まきながらヨーロッパ留学を決心する。

恒藤恭の在外研究時代のこととは、彼の回想「学徒生活の思い出」（『同盟時報』一九五二・七、八）や「学生生活の回顧」（『思想』一九五三・一）および、その続きの「学生生活の回顧（完）」（『思想』一九五

三・二)にくわしい。また、『復活祭のころ』(朝日新聞社、一八四八・五)収録の「巴里書信」をはじめとする書簡や日記、それに『若き日の恒藤恭』(世界思想社、一九七二・一)収録の「妻への便り」が参考になる。友人長崎太郎の未発表の「ヨーロッパ歴訪日記」(長崎日記)からも、恭のヨーロッパ滞在中のようすがうかがえる。これらの資料をもとに、その留学時代の足跡をたどることにする。

恭は出発に先立ち、上京して芥川龍之介に会っている。右の「学究生活の回顧(完)」には、「渡欧の途に就く前に上京して芥川に会ったとき、「僕がフランスにいるあいだに是非あとからやって来たまえ」と云ったら、「なんとか都合して行くよ」とかなり乗り気になって答えたものであった」とある。が、実際には芥川のフランス行きは成らなかつた。芥川家の人々の反対と、芥川自身健康に自信がもてなかつたからと思われる。

三年前大阪毎日新聞社の特派員として中国に出かけ、ジャーナリストとしての本領を発揮した芥川(小著「特派員 芥川龍之介」毎日新聞社、一九九七・二参照)だけに、このプランの実現しなかつたことは惜しまれる。この時芥川がフランスにいる恒藤恭に会いに行き、ヨーロッパ諸国をめぐるのなら、『支那游记』に続く『西洋游记』のような紀行文が生まれ、ヨーロッパを舞台とした小説が書かれたのではないだろうか。また当時美生活上のさまざまな問題に悩まされ、芸術上も行き詰まっていた彼の精神に、よき影響を与えるものが得られたのではないだろうか。芥川没後の追悼記事で恭は、パリからも勧誘の手紙を出したと言い、それが実現しなかつたのは「二つの点において甚だ遺憾である」として、次のように書いている。

一つには、和漢の文学において甚だ造詣の深かつた芥川は、西洋の文学についても恐る可き読書力を発揮してゐた。また、すぐれたる彼の芸術的感覚は、東洋の、絵画彫刻に対しても、西洋のそれに対しても、洗練たる鑑賞能力となつて働いた。欧羅巴における見聞は、彼の創作的精神の上に深大なる影響を及ぼしたであらうと想像される。二つには、此方が主として遺憾なのであるが、あの頃に彼が西洋へ行つたとしたら、恐らく彼の気持は一転したであらう、内的生活にも展開を来したであらうと考へられる。そして、多分あんなに早く死にはしなかつたであらうと思ふ。

(友人芥川の追憶「文藝春秋」一九二七・九)

恒藤恭がヨーロッパに向かつて出発したのは、一九二四(大正一三)年三月九日のことである。神戸港から白山丸に乗つての単身赴任の旅であつた。当時はフランスのマルセイユまで約四十日の船旅が必要だつた。彼はその間、数多くの書信を日本にいる妻雅に送っている。スケッチも数多く残した。『若き日の恒藤恭』収録の「妻への便り」(収録書簡は、現代表記に直されている)には、一九二四年四月五日付で、紅海の入口に近いスコトラ島の西南の船路で、日本へ向かう鹿島丸と行き合つ場面を報じたものがある。鹿島丸には日本小栗栖がくれる。恭も「アリガトウ、ゴキゲンヨウ」という返電を打つ。手紙にはその時の感想を、「あゝ、あの人たちは日本へいさんでかえつてゆくのだ。こちらはこれからヨーロッパをさしてゆくのだと思うと何んとか淋しいかなしい気持がした。何んという

あわただしい遭遇だろつと思いながら細ってゆく向うの船の姿を見まもつた」と記す。

四十日間の船の旅は、きつかった。「航海の愉快なのもシンガポール迄くらいだった」と彼は「妻への便り」(一九二四・五・一七付)に記す。船旅もはじめは興味があつても、昼夜暑さのきびしいインド洋あたりになると退屈さを感じ出す。同じ書簡で彼は、「見物もはじめほど興味をもたなくなるし船の料理はしつこくてだんだんおいしくなくなる。殊にコロンボを出てから紅海の入口に達するまでの間は退屈だった。船の中の一ヶ月あまりの日数、ことにそのあとの半分は毎日々が長い気がした」との感想をもらしている。

四月十三日朝、船はイタリヤの南端に近づく。「巴里書信」(第一信)には、「その朝、空は晴れ、海はおだやかで、しかも地中海の水のいろの美しいこと、いかにもやはらかく、美しく、人のこころをひきつける。山や丘は青々とみどりをかざつて居り、次第に海岸の村のけしきがみえる。オリブの木らしい、こんもりした樹木がはえつらなり、畑だのみちだのもはるかにみえる。家々の赤い瓦のやねや白い壁のいろが鮮かなみどりの中につつましくみえてゐる。マレイ半島や印度や、それにアラビアや、埃及やのけしきを見なれて来た眼には、いかにもそのけしきがやはらかみを帯びて、さすがにヨーロッパだと思はせる」とある。

一九二四(大正一三)年四月十七日、恒藤恭はマルセーユに上陸した。気候はさわやかで、眼に見るものすべてが珍しかった。その日はマルセーユを見物し、夕方の七時十分発の列車に乗る。翌十八日、朝八時五十分、列車はパリのGare de Lyonに着く。末川博が迎えに来ていた。

末川は一九一七(大正六)年に京大の法科を出て、大学院に進んだ。一九一九(大正八)年には、京大の講師となり、翌年助教に就任。そのため在外研究は、恭よりも二年も早く機会が訪れ、前述のように一九二二(大正一一)年の夏には、まずアメリカに行き、ボストンのハーバード大学やニューヨーク郊外のプリンストン大学に学び、翌年の夏、イギリス・ドイツ・スウェーデン、ノルウェーなどを旅し、以後フランスのパリで研究に励んでいたのである。

恭のバリの第一印象は、美しい都の一言に尽きる。それは「巴里書信」(『復活祭のころ』収録)の第二、三信にくわしい。例えば次のようである。

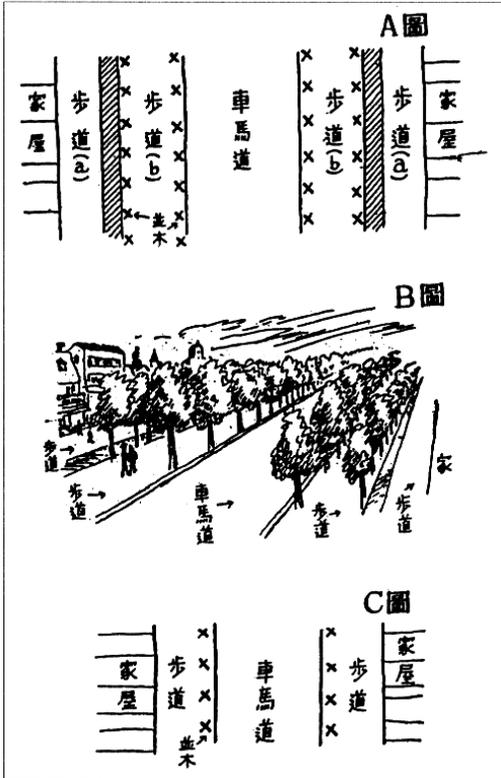
巴里は想像にもまさつてうつくしい都だ。うつくしいといつても、決してきらびやかな、けばけばしたうつくしさではない。何しろ大ていの建物は二三百年から五六十年もたつてゐる建物なのだから、みなものさびてゐる。町の並木なんかモナポレオ三世の時代にうゑたものが多いといふ。

巴里のうつくしさは近世数百年の間ヨーロッパの文化の中心となつてゐたフランスの文化が奥ゆかしく沈澱してゐるうつくしさなのだ。

それから凱旋門にのぼつた。中々高い。そして、くらい狭い石段をぐるぐる曲りながらのぼつてゆく。上からはたえず見物の人がおりて来る。頂上から四方を見はらすと中々見はらしがいい。イギリスやアメリカその他いろいろの国からの男女の見物人がぞろぞろあがつて来る。

凱旋門の広場から四方八方に町がひろがつてゐるが、中でも有名なシャン・ゼリゼー (Avenue Champs Elysees) これは大通りだけ、Avenue (といふ) が凱旋門と直角にはいつてゐる。それと交叉してゐるアヴニュー・ド・ボア・フロニーはことにその並木がうつくしい。どちらをむいても見わたすかぎり市街で、とほくはかすんでみえない。その中にあちらこちらにおほきい高い建物が眼にはいる。眼下を見おろすと合せて十二のとほりの一つ一つから出て来て、プラスに出ては、いろいろの方角に走せちがふ自動車のゆきかひがめまぐるしいほどだ。

四月十八日、パリに到着した恒藤恭は、末川博の案内でマルゼーユから同行した秋田の鉱山学校の教授の三浦という人とともに、地



下鉄に乗ってエトワールに行く。ナポレオンの建てた凱旋門のある広場である。彼は凱旋門に上つて、右の感想を抱いたのである。パリはまさに春爛漫といった感じであつた。いたるところにある大小の公園とかぎりもない街路樹とは、一せいに美しい若葉を装いはじめていた。リュクサンブール公園は天気はよく、復活祭の休日といふこともあつて、広い公園はいっぱいの人出であつた。

恭はパリの街路に感心する。「巴里の街路は欧米の都会の中で最もととのつてゐるさうだ。ロンドンでもニューヨークでもベルリンでも、こんなにぜいたくに街路をひろくつてゐないらしい」と彼は「巴里書信」に書き、上図のような見取図を添えて説明している。公園の手入れの行き届いていることにも彼は感心する。恭は末川博の案内でオペラを見たり、プラス・ド・ラ・ナシオンに祭りを見に行つたりする。そしてパリの町に慣れると、下宿さがしをし、シャン・ド・マルス公園の近く、Avenue Charles Floquet 三十二番地のルージュエという人の家に落ち着く。ルージュエは六十前後の技師である。

「巴里からの第二信」の四月二十二日の項には、「部屋はわり合にあかるく(東向き)きれいだし、家のある界隈も閑静で、比較的上品な所だし、末川君の宿からさう距たつてゐず、交通の便利もいふ所なのでよささうだから、ねだんをきいてもらふと、朝の食事と一週間一度の風呂と女中への謝礼とをこめて、すつかりで一月五百フランといふ。邦貨の現在換算率で八十四円ばかりにあたるわけだ。部屋のやうすや、家の位置からいつて安い、それでその場で明日午後からかりる事に約束する」とある。「巴里からの第三信」には、この新しい住居についてくわしく書き送つてゐる。

パリ到着一週間、彼は末川の手引きでなんとか一人で生活できるようになる。下宿が決まっただけからは、二人のフランスの婦人に来てもらい、主として会話を学んだ。また、当時「トロカデロの近くに世帯をもっていた武藤豊君と望月百合子さんに末川君から紹介してもらったが、御両人は親切によくいろいろの会合に連れていってくれたので、フランス人の生活に親しみをもちようになつた」(『学究生活の回顧』)という。

下宿先のルージュエ夫婦について恭は「妻への便り」(一九二四・八・五付、『若き日の恒藤恭』所収、収録書簡は現代表記に直されている)に何かと書いてある。恭のフランス滞在当初の下宿の人々の観察の巧みなどところを引用しよう。

マダム・ルージュエは子供がないので、子どももすきだ。「あのいつかの服は届きましたか。あの小さい嬢ちゃんがああ帽子をかぶつてあの服をきてるところをみたいものですな。あなたと奥さんがきつと写真をおくつて下さるでしょう。まだ写真はこないか」とたび／＼いう。あんなのでよかつたらときどき送る。公園などで子供たちの服装をみると、めい／＼何かしらかわつた工夫をこらしているようだ。こちらの子供があまり泣かないことは実にふしぎなほどだ。ころんだけでがをしたりしてもなく／＼泣かない。そしていったい他人をみてはにかまず、にく／＼する。なにしろ人口がいくらかずつフランスは減少するので、子供は大切に育てるようだ。マダム・ルージュエの如きは一人子で兄妹というものはなく二人あつた叔父さんは陸軍少将が何かだつたが世界大戦の折に二人とも戦死したそうだ。わけ

てその一人の方のおじさんによほど可愛がられたものらしくて、戦争がすんでもう五年もするのに未だに黒い喪服をつけている。そして芝居などにはゆかず、ピアノも弾かない。ピアノは四つ五つの時からけいこしたものだそうだ。大分得意らしい。自分で短い曲を作って出版したものが、いくつもある。僕にも一つくれたけれども、一度もひかない。ほんとうに淋しそうだ。その代わりに夫婦仲はいいようだ。

ルージュエ氏の方は、ほんとうに好人物だ。よく出来た人だ。細君の方におされているようだ。前の便りにかいたかもしれないが、こちらへ来た頃いたジュリアという女中は母親が危なくて郷里にかえり、丁度だん／＼おなかも大きくなつたところである。このうちからひまをとつた。何でもこの八月にお産をするそうだ。亭主はこの第七区の巡査だそうだ。その代りにこんどきたのはソフィーという女で、前にもかいたようにローレーヌうまされた。ジュリアほどかしくくないようだ。その代り朝から晩まで非常によく働くので、マダムの氣に入っている。何しろ家の中の掃除が中々の仕事だ。マダム・ルージュエは掃除がすきなようだ。ふつ／＼の掃除のほかは日かぎめてあつて窓をふかせたり、鏡、椅子、テーブルなどもいつ／＼もつやつやしている。なか／＼生活はつましい。わずかなものでも決しておろそかにしない。一つ買物をするにも選択が大変で、いろいろ品物をださせて見せ、その上で何んにも買わずに店をでたりする事は平氣だ。尤もこれはフランス人はいったいにそのよつた。ただ、花が大へんすきで花だけはいつも缺かさず、新しい美しいのを部屋にかざる。遠方の花そのから日かぎめて配達してくるよ

うだ。日本の活花のような趣味はこちらの人たちには知られていないが、それ相当地心をくばって活けるようだ。花の活け方など日本の方がよほど発達していると思う。

こまやかな観察であり、書簡といえども文学的香りが漂う。妻への便りにかこつけて、日仏文化比較論を展開しているかのようだ。

パリの恒藤恭には、日本の家族のことがしばしば頭をよぎった。特に幼い武二とはつ子が気掛かりだった。武二は一九一九(大正八)年八月三十一日生まれなので、当時満五歳、はつ子は留学前年の一九二三(大正一二)年秋の生まれであった。「妻への便り」では、しばしば二人の子のことが話題にされる。「武ちゃんは相変らず電車に興味をもっているそつだね。近いうちにパリの二階つきの電車の写真をうつして送るよ」「武ちゃんはやっぱりよく三輪車にのるとみえるね」「一九二四・五・一七付、「武ちゃんもこの頃は元氣回復して、近所の子供たちとよくあそぶそつだね」「一九二四・一〇・三三付、「武ちゃんが風邪を引いて喉をいためたそつだね。それでもだんだんいい方だとあるが、その後いかがかと、次の便りをまっっている」「一九二五・二・一五付、「はあちゃんがもう片言をしゃべるようになってたそつだね。どんなにかかわいことだろう」「一九二五・二・二三付」といった具合である。長男信一を病気で亡くしていただけに、恭は武二とはつ子が愛しかったのである。

三 イタリアへの旅

恒藤恭がパリ生活にに落ち着いた頃、一高・京大を通しての長年

の友、長崎太郎から便りがあつた。長崎はその頃、日本郵船ニューヨーク支店に勤務していた。彼は京大卒業後日本郵船に就職し、横浜支店を経て一九二〇(大正九)年四月からアメリカのニューヨーク支店にいたのである。

第一次世界大戦で勝利を収めた日本は、経済に活況を来たらし、特に船舶会社は莫大な利益を得る。そして世界各地に支店を設けるようになる。長崎は日本郵船がニューヨークに支店を開設すると同時に単身赴任していたのである。ニューヨーク時代の長崎太郎に関しては、別稿「長崎太郎論(下)」(『都留文科大研究紀要』第44集、一九九六・三)に記したので、詳しいことはそちらを参照してほしい。ここにはその美術と古書趣味のことだけを書いておく。

アメリカでの長崎は、仕事のかたわら各地の美術館をめぐり、また、ニューヨークの古書店をせっせと漁った。絵はもともと好きだった。一高で同級の恒藤恭をはじめ、芥川龍之介・久米正雄・松岡譲・成瀬正一らは皆、絵を好んだ。四年前同じアメリカに留学した成瀬正一は、学業そつちのけで、ニューヨークのメトロポリタン美術館はじめいくつもの美術館に、日参するように通っていた。長崎とて同様であった。遺族宅に残るいくつかの文章には、「アメリカは金持の国だけに、モネ・マネ・ドガ・セザンヌ・シャバンヌ・ゴッガンなどの絵を、かなり豊富に買ひ込んである。それらに接することは私にとつて嬉しいことの一つである」(『費(フレイ)府(フー)より』発表誌不明)とか、「アメリカではシカゴやニューヨークやボストンで、博物館や美術館を見てまはり、初めて欧州、ことにフランスの印象画に接した」(『堀り出し物』発表誌不明)といった文章を見出すことができる。

長崎太郎はまた熱心な古書収集家として、ニューヨーク時代を過ごしていた。彼は古書店めぐりをするうちにウイリアム・ブレイクの版画やトマス・ヒューイックの木版画、テニソンの自著のある詩集などを手に入れている。先にもふれたように第一次世界大戦後の日本の円の為替レートは高く、一介の若い会社員に過ぎない彼にも、何かと手を出すことができたのである。大戦後世界経済の中心は、ニューヨークに移ったとあって、ヨーロッパから稀覯本が流れ込んで来るという幸運にも恵まれた。後年京都市立芸術大学に寄贈された長崎太郎の洋書コレクション、エマソン、ホーソン、ソロー、ワーズワース、アーヴィング、ポーなどの初版本の数々は、主としてこの時代に集められたのである。

一九二四（大正一三）年春、ニューヨーク滞在の長崎太郎は、仕事に行き詰まりを感じていた。彼はニューヨークランドのアーマスト大学で勉強しようと思いついたこともあったが、日本郵船の仕事から離れられなかった。日本には妻美和と一九一九（大正八）年一月十二日生まれの子長男映吉もいた。妻子のためにも働かねばならなかったのである。彼は仕事に限界を感じていた。もともと彼は一高時代から教育に関心を持ち、教育界で働くことを願っていた。大学時代の親しい仲間も大学や高等学校に勤務していたから、いつかは自分の気持ちがあつたようだ。恩師佐々木惣一がニューヨークを訪れ、一夕食事を共にし、話が日本の教育に及んだ時にも、彼は恩師に、やがては会社をやめて教育界に身を投じるつもりだと語っている。彼は日本郵船の仕事を断固やめる決意をする。そして帰国する前のヨーロッパ旅行を計画していた。

恒藤恭が神戸港から白山丸でヨーロッパへ旅立ったのは、前述の

ように、この年の三月九日のことである。長崎は三月三日付の上田操（西田幾多郎の女婿、教育学者上田黨の父）からの便りで、そのことを知る。四月四日、京都大学の法科で同級で、当時京大の助教になつていた田村徳治がヨーロッパからニューヨークに到着し、長崎のオフィスを訪れる。以後十一日までの一週間、長崎太郎は田村をニューヨークの各地に案内し、旧交を暖めた。田村は長崎の六歳上、大学時代の交わりはさほどでもなかったが、異国での再会はうれしかった。長崎太郎の遺族宅に残る日記（長崎日記と命名する）には、田村の到着から出発までが詳しく書き留められている。四月十日の項には、二人の共通の友恒藤恭のことを話し合ったことが記されている。以下のような。

「Local」で丁目の支那めし屋に行つた。田村君と親しく話し合つた。井川君と赤城・榛名へ上つた時の話、古瀬温泉へ夜道を踏んだ時の話をした。田村君も、京都で井川君と親しく住んで一緒に議論をよくたかかわすことを話された。Morning side 公園を通つて帰るさ、田村君は「自分は恒藤君に会つて、初めてほんとに気の合つた人を見いだしたやうな心地がした」と言つた。

長崎は急に恒藤恭がなつかしく思われ、恭の行くであろうパリとベルリンの日本大使館宛に便りを出した。四月七日のことである。下書きと思われるものが残っている。長崎は会社生活を打ち切る心組みであること、ヨーロッパ旅行を企てていることを告げ、「若し、君と一緒にイタリーを旅行する事が出来たならば、毎日考えている

次第です」と書いている。恭は歓迎するの意を込めた返信を認めた。長崎太郎は恭からの便りを手に、落ち着けなかつた。アメリカ滞在は、すでに四年に及ぶ。彼は帰国して新しい分野の仕事に就きたかつたのである。そうした矢先、友のヨーロッパ行き、そしてパリからの手紙に接して動揺した。彼は予定どおり退職を決意する。その上で支店長の勝山勝司に帰朝前のヨーロッパ視察旅行を強硬に願ひ出る。一高・京大の先輩でもあつた勝山は、本社に連絡し、「請暇を許す」との返電をもらうなど、何かと便宜を図ってくれた。

五月三十一日、土曜日。長崎太郎はニューヨーク港を午前十一時に出帆、フランスへ向かつた。船はアメリカが戦争でドイツから分捕つたホワイトラインの優秀船ヒスマルク号である。同日、恒藤恭はパリのシャルル・フロケー街三十二のルージェ方から長文の便りを長崎に寄せている。長崎はこの書簡を見ずに旅立つたことになる。当初長崎は六月二十一日ニューヨーク出帆の船を予約し、恭にも旅程を知らせていた。五月十九日の便りにはその事を記し、「出来れば大兄と一緒にイタリーを旅行して見たい、ニューヨークでの四年に余る生活に疲れた頭を、多年思ひに思つていたイタリーの旅で休めたい、と願つています」との考えを披瀝した。が、どういふわけか出発は早められたのである。

恒藤恭の五月三十一日付の長崎宛書簡は、ご遺族の長崎陽吉氏宅に保管されている。心の籠つたよい便りである。恭はこの便りで、まず五月のパリの美しさを称え、「巴里は僕の期待に背かず、美しくもの懐かしい都会だつた。僕は日本を離れて、先ずこの地を居住の場所と決めた事は、本当によかつたと思つてゐる」と言つた。次にまだループルにも行つていないが、君が来るならそれまで行かずに

いようと述べ、パリのよさを次のように書きつける。

セーヌ河の岸などは幾度散歩しても飽かない。この間、一日川蒸気に乗つて四時間ばかり行つた所のサン・ジェルマンの森に行つたが、中々よかつた。或る日は、リンゴの花が咲き乱れ、さくらんぼが実つてゐる田舎の道を辿つて、第十世紀頃に建てられた城のルーインのあるモンレリーに行つた事もあつた。今年八十になつても、ごく若々しい色彩の木立や野原や村の景色ばかり描いてゐる画家の家を訪ねた事もあつた。僕にとつては、この巴里だけでも深い興味を誘ふものが数知れずある。君にはどうか分らないが、しかし巴里は多くの日数を滞在するに値すると思ふ。第一こちらの人間は、人種的差別をしないのが氣持がいい。中世的色彩のこまやかなイタリーの建築や絵画を鑑賞する前に、この近代文明の中心の巴里に来てみる事もいゝだらう。セザンヌ・モネ・ゴッガン・シャヴァンヌ・ルノアールなどと云つたやうな人々の描いたテーマがそこに溢れてゐる。ミレーの住んだあの村も、彼の描いた田舎家や村等はそのまゝに残つてゐるさうだが、まだ行つて見ない。

兎に角都合がつく事ならば、先ず巴里に来たまへ。たとへやうも無く美しい若葉の眺めはもう見られないし、この都を飾るにいかにもふさわしいマロニエの花も散つてしまつたけれど、君の疲れた心を慰めるに足るものは色々あるだらうと思ふ。この間訪ねたモンレリーのシャトーのある小高い丘の麓の林の陰にある旅館などへも一緒に旅行つて泊まつてみたいね。その田舎の町や野原を見晴らす小さつぱりした二階の部屋を見せて貰

つたが一度来て泊まつてみたい気がした。

さらに「為替の關係で生活費も割合に楽なやうだ」と書き、下宿のことからパリの料理のうまいことまでを言った後、「一旦日本に帰つたら又出直してやつて来るといふ機会は中々得難い訳だから、来るならゆつくりヨーロッパにある事をお勧めしたい。そしてこの巴里に住んで、近代文明のエッセンスを味はう事をお勧めしたい。フランス語も習得するに十分値すると思ふ」とまで言っている。

一九二四(大正一三)年六月七日、長崎太郎はフランスのコタンタン半島のシエルプール港へ上陸し、汽車でパリに向かった。恒藤恭はガール・ド・リオンで長崎を迎えた。恭は翌八日、長崎をルーブル博物館へ、九日はベルサイユ宮殿へ、十日はバルビゾン村、ミレールの家などを案内した。

当時パリには、恒藤恭や長崎太郎の二高時代の同級生成瀬正一がいた。成瀬は三年前の一九二一(大正一〇)年二月、フランス文学研究の目的で日本を離れ、ロンドンを経て同年四月からパリに住んでいたのである。この期間に成瀬は、松方幸次郎の絵画収集の手伝いをし、いわゆる松方コレクションの形成に大きな役割を演じることとなる。成瀬の松方コレクションとのかかわりの詳細は、小著『評伝成瀬正一』(日本エディタースクール出版部、一九九四・八)に記したので参照して欲しい。恒藤恭と長崎太郎の二人は、六月十三日にパリの成瀬の家を訪ねている。「長崎日記」の同日の記事の一節に「恒藤君の宅に行き、それから成瀬君を訪問」とある。一方、成瀬は松岡譲宛書簡(一九二四・六・二三付)の中で、「先日、井川君と長崎君の訪問をうけて驚いた。二人とも変てゐないが、こんなところで会

はうとは到底思ひもよらないことであつた」と記している。

一九二四(大正一三)年六月十七日、恒藤恭と長崎太郎はイタリアへの旅に出る。フランスのジジョンを通り、スイスのローザンヌを経てイタリアに入り、ミラノからジェノヴァ、ピサ、ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ポロニア、パトヴァをめぐり、ヴェネツィアに至る約一か月の旅であつた。この旅は、ヨーロッパに来てからはじめての長旅であり、恒藤恭にとって思い出の深いものとなつた。彼は後年しばしばこの旅を回想し、文章に書き残した。そのいくつかは恭の随筆集『復活祭のころ』(朝日新聞社、一九四八・五)に収められている。なお、一緒にイタリア各地をめぐつた長崎太郎には、未刊行の克明な日記(『長崎日記』)のほか、若干の回想文がある。

イタリア美術巡礼ともいえる二人の旅は、ミラノからはじまる。一九二四年六月十九日のことである。汽車がスイスからイタリアに入ると、景色も変わつて南の国の強い色彩を帯びてくる。二人はミラノ中央駅で遅い昼食を済ませると、案内人を断つてドウオーモへ行き、イタリア最大のゴシック建築とされる大聖堂の前に立つ。中にも入り、ステンドグラスの窓を見ている。翌二十日はブレラ美術館とボルデイ・ベツォーリ美術館の二つを見学する。蒸し暑く曇つた日であつた。エリフォールの『世界美術史』を懐に入れての美術館めぐりが始まつたのである。彼ら二人の心は、緊張していた。久しくあこがれていた国に身を置き、夢に描いた美術品の数々に接し、重苦しい精神の疲労も感じていた。波面づくりの聖徒の顔、血に染まつた殉教者の苦悶の表情、キリストのまわりの女性すら寂しくかたくなな顔立ちに描かれている。若き日聖書に深く接していた二人だけに、それらの絵からはさまざまな思いを受けるのであつた。

恒藤恭の「天使のいばり」(『文藝春秋』一九二六・二二)、『復活祭のころ』収録)は、こつした美術館の絵について述べる。そしていくつもの絵の中に、崖の縁で尿をしている愛すべき天使の図柄を見出し、ほつと安心した気持ちを感じたことを記す。以下のような引用文中のN君は、言つまでもなく長崎太郎である。

「N君ちよつと来て見たまへ。おもしろい絵があるよ」と私は室の彼方の隅に立つてゐる友人を呼んだ。そちら側の壁に懸つてゐる絵を見まはしてゐた彼は、踵をめぐらして私の傍らにやつて来た。そして私のゆびさす絵の一劃を注視しながら、「やあ、こいつは愉快だなあ」といつて、うれしそうにわらつた。

それは多くの天使たちが楽園にあそび戯れてゐるありさまをかけた絵であつた。向つて左の三分の二ばかりの画面は、のどかさうな林泉の景趣を呈し、残つた右寄りの三分の一の画面には、けはしい崖の上にも、草花の咲きみだれた崖の下の平地にも、おほぜいの天使たちが遊んでゐる。崖をめぐらして勢ひよく空中を飛んで来る五六の天使もある。細緻な筆触で樹木の枝や葉が描かれ、空の隈や崖の岩角のくぼみやがうつしく沈んだ色彩に暗く塗られてゐた。構図の巧みさなり、色彩の程よい調和なりを示してゐるものの、取り立てて言ふべきほどの作品ではなかつたが、所狭く壁に懸けつらねてゐる沢山の絵を見て行くうちに、偶然その絵の中に氣がかれてゐる一人の天使の所作が眼にとまり、暫時その前に佇んだのであつた。

絵の右の方の上部にたはむれてゐると群れの天使の中の或

る者たちは手をつなぎ合はせて舞踊し、或る者たちはしやがんだり、腹這つたりして、崖の下を覗きこんでゐる。その傍でひとり天使は、それは他の仲間たちと同じやうに、むつちりと肥つた手足と、ささやかな翅の一とつがひとをもつてゐる。崖のふちに平然と立ち、崖の下をめぐらして尿りをしてゐる。

美術館の多くの絵が中世風のキリスト教解釈による題材によつて、「陰惨な構図と深刻な色彩」をとるのに対して、この愛すべき天使は、すべてに解放されており、二人に安堵感を与えたと恭は言うのである。六月二十日の「長崎日記」には、「最初見たPalazzo di Breraには、自分の好きな基督の像(Taibenti)があつた。次に行つたMuseo Poldi Pezzoliには、TitanのMadonnaがあつた。美しいMuseumである」とある。この日は午後にはジェノヴァに向け出発する。汽車は麦畑に桑の木が混じる平原を走り、夕方、ジェノヴァ駅に着く。ジェノヴァはイタリア最大の貿易港を持つ港町である。コロンプスの出生地として知られる。駅前のホテルは「頗る感心しない部屋」(長崎日記)であつたという。翌日は、白の宮殿と呼ばれるPiazza Bianco美術館とサン・ロレンツォ教会の宝物殿を見学している。

午後はまた汽車に乗り、ピサへ向かう。海岸に沿つて走る汽車は、いくつものトンネルをくぐりピサに着く。二人は夕暮れのアルノ川の岸辺を散歩し、夕日に照らされた斜塔を眺めた。翌二十二日はピサ市内を見学する。まずドオオーモ広場へ行く。ここは市民の憩いの場であり、斜塔をはじめ主要な記念碑が集まつているピサの顔である。ドオオーモという建物は、ピサ様式の代表的建物である。恒

藤恭と長崎太郎のイタリアの旅は、雨に絶えずつきまとわれたが、この日も雨だった。「長崎日記」の六月二十二日には、「雨。Duomo に行く。地獄の絵を見る。雨の斜塔に上る。壁画の美しいのは、今日初めて見た訳である」と記録されている。

翌日は午前中美術館に行き、午後は汽車に乗って夕方ローマに到着、一泊し、二十四日はナポリにいた。まずナポリとポンハイを訪れ、帰途にまたローマによる旅程であった。ナポリはイタリア南部最大の都市であり、地中海に面した風光に恵まれた町である。二人は着くとすぐ城塞（アンジュー家の城）を見る。夜は海沿いのレストランで、イタリアの歌を聞きながら食事をする。二十五日はポンペイに行く。マリアの寺や孤児院をめぐり、ポンペイの遺跡を見て回る。またヴェズヴィオ山の噴火口近くまでも足を延ばしている。二十六日は午前中 National Museum に行き、沢山の彫刻と絵を見る。そして午後列車に揺られてローマに着く。その日は前に一度入ったレストランで夕食をし、Hotel de Ville に泊まる。

ローマは言うまでもなくイタリアの首都で、古代ローマ時代から続く「永遠の都」である。彼らのイタリア旅行の最大の関心はローマにあった。それゆえ滞在は、六月二十六日から七月二日までの一週間に及んだ。ローマでの二人の行程は、これまた「長崎日記」に見ることができる。それによると長崎太郎は、ローマに着いた頃から下痢がひどく、苦しんでいる。恭の「妻への便り」(『若き日の恒藤恭』収録)の一九二四年七月二十八日付にも、「長崎君はローマで下痢をして一時は心配した。何しろイタリア料理はフランスのとはちがつて油こくしつこいので腸をいためる」とある。

到着翌日の午前は、フォロ・ローマーノに行く。ここは神殿やバ

ジリカ(集会所)などの立ち並ぶ、ローマ帝国の中心地であったところだ。イタリアの夏は暑い。目もくらむような太陽の照る中、観光地図を手に彼らは石畳を踏みながら古代ローマを歩くのであった。下痢でふらふらしていた長崎は、パラティーノの丘にのぼった時、倒れそうになった。そこでその日の見学はとりやめ、ホテルに戻り、絶食して床に伏すことになる。恭は一人買い物に出掛けた。

六月二十八日、絶食のため体が疲れていた長崎をいたわりながら、恭はまずコロッセオ(コロッセウム)に行く。コロッセオは四層の大建築で、その周囲は五二七メートルもある。六万人もの観客を収容したという巨大な施設を見上げ、二人は感慨にふける。次に馬車でサン・ピエトロ広場からシステーナ礼拝堂に行き、はじめてミケランジェロのモーセを見る。「長崎日記」には、「力強い realistic な作である。両側に置いた婦人(リアとその姉妹)の彫刻も実に美しく、両者の対照がよいと思はれた」とある。恭はふと日本の友人芥川龍之介のことを思い出す。この礼拝堂のミケランジェロの天井画と壁画の複製を見て興奮した芥川が、現物を見たらどんなに喜ぶことかと思っただのである。彼はそのことを後年「友人芥川の追憶」(『文藝春秋』一九二七・九)に書くことになる。この日はさらにカピトリノ美術館とコンセルヴァトリー美術館を駆け足で見ている。

六月二十九日、八時半ごろ二人はホテルを出て、カラカッラの浴場からカタコンベ(地下墓地)に回る。皇帝カラカッラの時代に完成したこの浴場は、各種の色で化粧された大理石の外壁を持つ、一辺が三三〇メートルの巨大な建築物で、一度に一六〇〇人以上が入浴できたという。二人は馬車を走らせ、カラカッラ帝の湯の前に立つ。その後サン・ピエトロ広場に出る。人々が参詣のため群れ歩いてい

た。聖堂内では讚美歌が歌われ、法皇が祈禱を捧げているのを見る。午後はパンテオンの壁画を見に行く。窓の明かりがドームの内に落ちるのを長崎太郎はおもしろいと思ったと「日記」に記す。

六月三十日、再びサン・ピエトロ広場へ行く。システリーナ礼拝堂に入り、天井のミケランジェロの偉大な壁画を見入る。ポツチエリーやその他の壁画を鑑賞した後、ラファエロの間に入り、*Angerico*の壁画の部屋を経て、彫刻室に行く。暑い中での強行軍の鑑賞は、いくら美術に関心があったとはいえず、きつかったであろう。翌七月一日も二人は、彫刻室に来てギリシャ・ローマの彫刻を一つ一つ見て回った。

七月二日、七日に及んだローマ滞在を切り上げ、恭と長崎太郎はフィレンツェへと向かった。フィレンツェは糸杉とオリーブの緑の丘に囲まれたトスカナ州の州都である。町はアルノ川の両岸に展開している。言うまでもなくルネッサンス美術の宝庫の町である。また、洗練された優雅な都市としても知られる。到着した日の午後には、二人は早速ウフィツィ美術館を訪ねている。ここはルネッサンス期の芸術品を集めた大美術館である。この日はPitch Galleryのみ見て帰る。

七月三日、午前中ウフィツィ美術館に行き、数々のイタリア画家の名画を見る。ポツチエツェリリの「ヴィーナスの誕生」、「春」、レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」などである。午後はドォーモ美術館へ行く。ここではミケランジェロの未完成の「ピエタ」やドナテッロの「マグダラ」を見ている。それからサン・マルコ修道院とサン・ロレンツォ教会を見学する。サン・ロレンツォ教会ではドナテッロの手になる室内装飾を見ただけで、メディチ家のチャ

ペルは、五時閉門のため見る事ができなかった。

フィレンツェは見るところが多い。七月四日はまずサンタ・クロチエ教会を訪れる。イタリアで一番大きいフランチェスコ会の教会である。ジョットの「洗礼者ヨハネの生涯」などの壁画を見、ミケランジェロ、ガリレオ、マキャヴェリの墓に詣でた。次に国民博物館へ行く。夏の盛りであった。ドナテロやミケランジェロの作品の前にたちすくんだ二人は、館内の熱気に参っていた。下痢に苦しんでいた長崎は、目まいを覚え、風に当たろうと建物の外側につけられた階段に出る。先に出ていた恭が写真を撮ると言つので石段の中段に腰を下ろして、ふと建物の側面を見上げて長崎は驚く。黒ずんだ壁には長方形の不思議な彫刻をした装飾がいくつとなく取り付けられて、頭上にはイタリアの真夏の澄んだ青い空が見える。彼は思わず、「この建物には見覚えがある。僕は今ニューヨークに残してきた絵の真ん中に座っている」とつぶやいてしまう。

それはまさしく彼がニューヨーク郊外のヤンカースの古道具屋で買い求め、下宿部屋の正面にかけて、三年間毎日毎晩飽かずに眺めてきたものであった。彼は石段に座ったまま、急いでベデカの旅行案内を取り出して読む。それによるとこの美術館は、昔からバルジエロの宮殿と呼ばれた建物で、かつては最高裁判所であり、その後十九世紀の半ばまでは牢獄、さらには警視總監のいたところであった。国民美術館になったのは、十九世紀の末のことであるという。何だかわからないものの、古風な南欧の建物だと思って、ニューヨークの下宿に飾り、毎日眺めて暮らしていたこと、今、克明に描かれたその絵の真ん中に自身が座つていることを、長崎は不思議に思う。彼はこの体験を、後年『防長新聞』の「日曜随想」欄(一)

九四九・六・二六)に書くことになる。

その日の午後は、最初にアッカデーミア美術館でミケランジェロの「ダヴィデ」像を、次にサン・マルコ美術館に急行し、四時までフラ・アンジェリコを見る。アンジェリコは画僧で、天使の絵に独特の才を示した。「音楽を奏する天使たち」などがある。各部屋の壁にはアンジェリコらのフレスコ画が描かれている。さらに馬車を駆ってアルノ川沿いのサンタ・マリア・デル・カルミネ教会へ行き、マザッチョのフレスコ画のアダムとイヴ(「楽園追放」)を大急ぎで見ると見る。

七月五日はウフィツィ美術館を再訪、ポツティツェツリ、ジョット、チマブエ、ダ・ヴィンチなど文芸復興期の人々の絵画を鑑賞する。またウフィツィ美術館と肩を並べるとされるピッティ美術館(バラティナ美術館)に行き、ラファエロとティツィアーノの作品に親しむ。フィレンツェ最後の夜、恒藤恭は失敗の連続であった。「長崎日記」には、「夕飯を食べた釣りを恒藤君が Guide Blue を読んでいた為早速受け取らなかつたので、ボーイが Merci と言つて持つて行つた。恒藤君怒る。帰りに、先生は今晩買ったばかりの Romme を忘れて来てしまつた」とある。

フィレンツェには五泊六日滞在し、七月六日朝八時過ぎの汽車で、二人はポローニヤに向かった。ポローニヤの起源は、古代ローマ以前にさかのぼる。中世十一世紀以降、自治都市となつたポローニヤは、ヨーロッパで最初の大学をつくつたことでも知られる。一時過ぎにポローニヤに到着早々、二人は若きミケランジェロの作品を尋ねてサン・ドメニコ教会へ行く。ここにはミケランジェロの初期の作品「天使」と「聖ペテローニオ」と「聖フローコロ」の像がある。

空は青く澄んでいた。二人は眼鏡をかけた人のよい神父に案内して貰つて、ミケランジェロを見た。その後ポローニヤ大学を訪ねる。

七月七日、恒藤恭と長崎太郎は十時五十分のヴェネツィア行きの汽車に乗り、一時四十分パトヴァに途中下車する。パトヴァは古代ローマ時代からの町で、ここにはポローニヤに次ぐ重要な大学が中世に生まれている。見学したスクロヴェーニ礼拝堂は、ジョットの壁画で飾られていた。「Giottoの色は美しい。黒のかけは使はないで、派手な色を塗りつぶしてあるが、それがよく調和している。彼の藍の色は、晴れた夏の真昼時のイタリーの空そのまゝの青である」とは、「長崎日記」に記された感想である。夕方、五時二十分の汽車に乗り、一時間ほどでヴェネツィアに着く。青銅のドームと黒のゴンドラ、立ち騒ぐ人々の姿が印象的であつた。

水の都ヴェネツィアは、ローマ、フィレンツェに次いで彼らの期待した町であつた。町は浅瀬の海の砂州の上に、石を築いてつくられていた。大小多くの運河が縦横にはりめぐらされ、四〇〇以上の橋でつながれる。到着した夜はゴンドラに乗つて運河を下り、沖へ出ている。翌日の七月八日は、午前中ヴェネツィアを代表する教会であるサン・マルコ教会を見学する。「新約聖書」の「マルコによる福音書」の著者を祀るためにつくられたこの教会は、五つのドームをのせたビザンティン風の建物で知られる。内部は天井や壁が聖書の物語のモザイク画で飾られている。彼らはモザイクの美に目を奪われる。

次にパラッツォ・ドゥカレ(統領宮殿)に行き、広い部屋部屋をめぐり、ティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼなどの壁画や絵を見る。午後はツアー客に加わつて、サンタ・マリア・デ

イ・フラリー教会、サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ教会、ジユジュイット教会、レゾニコ宮殿などを見た。夕食の後ゴンドラに乗って大運河を通る。九日はアツカデーミア美術館を訪れる。ここにはヴェネツィア派の画家たちの名作が並ぶ。ベッリーニ兄弟、カルパッチョ、ジョルジョーネ、テツツィアーノ、それに「長崎日記」によれば、「Tintoretto、Veroneseが幅を利かしていた」ということになる。

ヴェネツィアには七月七日から十一日までの五日間滞在した。イタリア最後の夜は、ゴンドラに乗って大運河めぐりをする。恒藤恭の「妻への便り」(一九二四・七・二八付、『若き日の恒藤恭』収録)には、イタリア美術訪問の旅を次のようにまとめている。

ナポリについて地中海のはればれしたうしろ色の上にヴェネシアスの山をながめた後、ローマに入って「永遠の都」の中にみち／＼といる歴史上の遺跡をたづね、更にアルノのながれがしずかに、美しい木立におおわれた丘を四方にめぐらすフィレンツェをとい、しばらくしてなりわたる方々の寺のかねのひびきをききながら博物館や寺をたずねてまわった上、ヴェネチアについてゴンドラにのって美しい堀わりの中をつたってゆくというような旅の楽しみは、イタリア以外の国では味わうことの出来ないものだ。イタリアの夏は暑いが元来イタリアは南国なのだから、実は夏の日光のかがやきの下にみるイタリアの都会は一年中で一番美しいのだ。すみきつた青空に高くそびえたつ大理石の建物のうつくしさは何ともいえない。イタリアは実に大理石が豊富でおしげもなくつかっている。これだけはフラ

ンスでもまねが出来ないのでフランスの建物はイタリアの建物よりもしびしい。そして寺院の内部の壁画などは夏の日光のつよい時にやつとよくみえるというのが多い。それに寺や美術館の中はどんな日でもひんやりとしている。冬などはひえて、とても長く見まわっておれないだろうと思う。何よりもありがたいのは夏はどこでもホテルがすいている事で(但しスイスはちがう)そしてイタリアでも(ヴェニスだけは例外)おかげでわれ／＼は一度も部屋がないといつてことわられたことはなく、どこでも歓待してくれたものだ。美術館なども見物人が少いから思うまゝに見ることが出来た。

恒藤恭と長崎太郎は、とにかく絵や彫刻が好きだった。二人とも素人ながら鑑識眼は高かった。その頃一高で一年先輩だった矢代幸雄が、フランスからイタリア入りし、フロレンスにいた。矢代は美術研究をライフワークとし、当時はルネッサンス期の美術を研究していたのである。彼はのちに美術評論家として世界的評価を得る人物である。が、恭と長崎は、矢代の世話にはなっていない。彼らは自分自身の眼で絵や彫刻を見ようとした。早くから美術に関心があった二人には、それなりの自信もあったのだろう。恭は鑑賞ばかりか、絵筆を握ってもプロはだしの腕を持っていた。長崎太郎とてしかりであった。後年長崎は京都市立美術大学(現、京都市立芸術大学)の学長として敏腕を振り、芸術に携わるすぐれた人材を育てるが、その素地はこの頃からあったことになる。

イタリア旅行を終えた二人は、ドイツに行くか、スイスに行くか迷ったが、結局スイスへ行き、ユングフラウに登ることになる。七

月十一日、汽車がスイスに入る頃は、すでに夕暮れに近かった。空気が変わって二人は肌に寒気を感じた。半月のかゝつた空に暮れ残る雪の山を眺めることができた。恭は「妻への便り」(一九二四・七・二八付)に、「スイスに入ると雪にかがやくアルプスの山々、すきとおるような水をたたえた大小の湖水、ひろい牧場、崖にかかる沢山の滝、野や山の間を走る急流そしてその間にある美しい建物、それが地方によつてそれぞれ景色がちがっている」と書きつけている。

七月十二日、恭と長崎は汽車でユングフラウへと向かった。湖水の風景が美しかった。「長崎日記」には、「湖(Thunensee)にそつて走る水の青、空の青、岸の緑、たゞ一幅の美しい絵である」とある。ユングフラウの頂上に着いた時は、丁度正午であった。人々が谷間でスキーをやっているのが見えた。

パリに戻つたのは、翌日、七月十三日の深夜である。長崎太郎は一日置いた七月十五日、一人イギリスの旅に出る。そして各地をめぐり、八月十二日、勤務地のニューヨークに戻り、帰国準備に取り掛かっている。八月十三日付恒藤恭宛書簡に長崎は、「六日こちらに居て、すぐ出発します。慌たゞしい旅であります。ノ我まゝを言つたのは大兄でなくて実は、小生であつたことを恥じます。ノそれにも拘わらず、色々の事でご寛容下さつた事を感謝致します」と書きつけている。

四 ドイツへ

一九二四(大正一三)年十月下旬、恒藤恭は仏独国境を越えて、ド

イツ西南部の都市、ハイデルベルクに行く。大阪商大の竹島富三郎と一緒にだつた。ハイデルベルクにはドイツ最古の大学ルブレヒト・カール大学(普通ハイデルベルク大学と呼ばれる)があり、世界各地から多くの留学生が集まつていた。彼は一か月半ばかり大学のいくつかの授業を聴講している。ヤスパースの哲学概論、ロータツカーの社会哲学などに出るが、ことばの壁は厚く、十分には聴き取れない。ドイツ文学の立澤剛の勧めで聴講したグンドルフの浪漫主義文学についての講義は、いくらか解りやすく、ひきつけられる。これは公開講義で年配の婦人も出席していた。その他アルトマンの財政学のゼミ、ザーリンの経済原論のゼミも見学している。久し振りに学生生活に帰つたようで、精神は緊張し、充実していた。ハイデルベルク到着間もない十月二十五日付の「妻への便り」(「若き日の恒藤恭」収録)がある。町の位置や特色が丁寧に説明されていて興味を引く。

独乙はアメリカのように連邦国で、プロシアをはじめたくさん
の国から出来上つている。フランスはそれとちがって全体が
一つの国で、日本と同じだ。

ハイデルベルクはバーデン国の中にある。バーデンの首府は
カールスルーエだ。となりにはバイエルン国があり、その首
府はミュンヘンなのだ。

地図でみればわかるように、同じドイツといつてもハイデル
ベルクなどは、西南の方にあり、フランスにそれほど近い。巴里
とハイデルベルクとの間の方が、伯林との間よりも近いくらい
だ。

ライン川はオランダに河口があり、ドイツに入ってケルンの

そばをとる。この辺りはベルサイユ条約によって、ドイツが償金を十分払うまでの間、フランスの軍隊が占領しているところだ。それから、ストラスプールの辺りからフランスとドイツの国境を流れている。ストラスプールの東の方に別れている支流がある。ネッカア川という。ハイデルベルグはそのネッカア川にまたがった小さい都会だ。

人口七万ばかりあるにすぎぬけれど、ハイデルベルグは中々有名な都会だ。景色がいろいろと、ドイツで一番古い教会があるのとで有名だ。

京都の東山をみるようなゆるやかな形をした山々が並び立っている間を、ネッカア川が流れて、ライン川の平野の方へ出てくる。その山と平野との境のところにはハイデルベルグの町がある。

山はいま一面に黄やからいろや紅やにそまっっている。町の中にある並木や、庭園の樹木なども秋のいろにかざられ、しきりにおちばが風にふかれておちる。

ハイデルベルグでの恭は、独立家屋に住んでいる。庭つきの家である。彼はこの町での生活の様子を、「妻への便り」に詳しく書き送ることになる。十八歳のドイツ人とフランス語の新聞を一緒に読み、フランス語の会話を忘れないようにするがたがた、ドイツ語の会話をやることにしたなども報じている。相変わらず学ぶことにかけては貪欲である。十二月三日、恒藤恭は三十六歳の誕生日をハイデルベルクで迎えた。家主の未亡人が祝ってくれた。その二、三日後に恭はパリに戻っている。

恭が再びドイツ入りし、ベルリンの南郊ダーレムに四十日ほど住むのは、一九二五（大正一四）年四月半ばから五月末までのことであった。ツォー駅で下車した彼は、栗生武夫に迎えられる。栗生は恭の大学の一年後輩であり、大学院時代から深い交流があった。二人は、毎月一回開かれた佐々木惣一を中心とする法律研究会での常連である。西洋法制史を専攻した栗生は仁保龜松につき、一九二二（大正一一）年に東北帝国大学に法文学部が創設される際に招かれ、翌一九二三（大正一二）年から在外研究員としてベルリンに滞在していたのである。後年恒藤恭は「忘れえぬ人々　その一　栗生武夫君の追憶」に、ドイツ時代の栗生武夫のことを書き残すことになる。それによるとダーレム滞在中の恭は、「ほとんど毎日のように栗生君と出会いながら、たのしくベルリンで過ごした」という。二人は閑静な住宅地にそれぞれ近くに間借り生活をしていた。昼食は栗生の寄宿していた老婦人の家でした。恭の右の文章に聞こう。

その家（注、栗生の寄宿先）と私の住んでいた家とは、どれほども隔たつていなかったから、昼食をすませると一旦帰宅し、午後三時すぎから再び栗生君をおとすれて、よく散歩に出たのであったが、京都の栗田口の宅にたずねて行ったときとおなじように、「よう、恒藤君、よくいらして下さった」と言いながら、同君は玄關先に笑顔をたたえてあらわれた。時にはベルリンの中心部にまで足を伸ばすこともあったが、たいていはそこいらを足のむくまにきまあるきまわるならいであつた。そして、しばしばダーレムのチール・ブラックの喫茶店に立ち寄り、屋外にならべられた小卓の一つをはさんで腰をおろした。栗生君

はいつもきまつたように、「ケーキとミルク入りのコーヒーを」
(Tarte und Kaffee mit Milch)と給仕人に注文したものだ。

第一次世界大戦で敗れたドイツの国民生活は、経済的・社会的にきわめて苦しい状況にあった。一九一八(大正七)年十一月に休戦条約が成立したころには、戦力を支える肝腎の経済的国力は消耗しきっており、加えて巨額の賠償金を課せられたため、一九二三(大正一二)年に入って加速度的にインフレが進行し、国民経済は崩壊の一步手前であった。が、ドース案に基づく諸政策によって、とにかくも一九二四(大正一三)年には相対的安定期に入り、恒藤恭がベルリンに入った一九二五(大正一四)年の春のころには、ドイツ社会はようやく平静を保つようになっていた。けれども、その内面は依然暗かった。ヒトラー率いるナチスは、鳴りをひそめていたというものの、活動は続けており、ワイマール憲法時代の大統領ヒンデンブルクの特別権限による権威主義的統治の推進などもあって、問題は山積していた。ヒンデンブルクはエーベルト大統領の死後、大統領選でマルクスに勝って登場したのである。恭は時々夜栗生の下宿に行つては、彼と二人で、あるいは同宿の金沢医大の石坂伸吉と三人で、「ドイツの将来やナチスの問題などについて、また革命ロシアの問題について、さらには日本の政治情勢について、夜の更けるまで議論し合つた」という。

一九二五(大正一四)年五月二十八日、恒藤恭はベルリンを去つてキールに行き、その大学に入学する。キールはドイツ北部ユトランド半島のバルト海側のつけ根に位置する港湾都市である。商業都市としても発展し、早く都市権を得、ハンザ同盟の一員ともなつた。

大戦中はドイツ海軍の戦略上の拠点であつた。恭が訪れた頃のキールは、ヴェルサイユ条約の条項に基づいて軍港の施設が破壊された後の平和な、静かな都市であつた。

キール大学の創立は一六六五年である。歴史のある古い大学で、教授陣には有能な学者が多かつた。キールは緯度が高く、涼しいこともあって、毎年夏の学期には多数の学生が集まるのである。恭は教育学を専攻する橋本重次郎と同じ下宿にあり、橋本の指導教授のブロックドルフの世話になる。ブロックドルフはテンニース(ゲマインシャフトとゲゼルシャフトで知られる)の高弟である。テンニースは定年を越え、当時はキール大学の講師をしていた。恭は渡欧前にテンニースの学説から示唆を与えられて、『社会と意思』(弘文堂、一九二四・二)という本を出版していた。それだけに彼は「講壇に立つても静かに講義をするテンニースの年老いた小柄の風貌をひときわなつかしく見まもつたものである」と「学究生活の回顧」(『思想』一八五三・一)で言つ。経済原論のゴットル教授の講義を聴き、その研究室を訪ね話したこともある。キール生活の一端を示す文章を右の「学究生活の回顧」から引用しよう。

キールは北緯五十度四分あたりに位している都会で、極東の地域にくらべると、およそカラフトの北端あたりに匹敵している。だから、夏季は非常に夜がみじかく、昼が永い。ある日のよる十四五人の教授諸氏のおつまつた会合に招かれたときに、順番がまわつて来て私もみじかいテーブルスピーチをやつたが、これは後にも先きにも私がドイツ語でテーブルスピーチをこころみただけの経験であつた。たどたどしい限りのもので

あつたが、それでも席上の人々は威勢よく拍手をしてくれた。日本人とはちがつてドイツ人はつまみもののようなものを食べるといふことなく、次々にビールを呑みほすしきたりであるが、なんとか彼とが口上を述べては、みんなが杯をあげてビールを呑みほすのであつた。夜半の二時すぎごろ散会して、海岸伝いの道をかえつて行くと、もう東の空は明けそめていた。

キール滞在中の恭は、橋本と二人してバルト海に臨むラバーという海水浴場に行ったり、キール運河に行ったりしている。またプロックドルフ教授の家を訪問し、その優雅な生活に目を見張っている。

この年、一九二五（大正二四）年七月の半ば、恒藤恭は橋本と東京高師教授の佐々木秀一と三人でイギリスへと向かった。汽車でハンブルクまで行き、船でイングランドの北東海岸ハンバー川の河口の町グリムズビーに渡る。ここでエジンバラで開かれる国際教育学会に出席する橋本と佐々木に別れ、恭は一人ロンドンへ行くことになる。この夏はオックスフォード大学やケンブリッジ大学を見学したり、スコットランド地方を旅行したりしている。英国議会の傍聴もこの間にしている。当時は労働党内閣の頃で、マクドナルドが演壇に上つて、チャーチルとやり合っているのが印象に残つた。イギリスには九月末まで二か月半滞在した後、十月のはじめに北フランスのルールからベルギー各地を見学して、ドイツに入国した。ドイツはケルン、ボン、フランクフルトをめぐり、再度ハイデルブルクを訪れている。その後は南ドイツからオーストリアのウィーンやチェコスロバキアのプラハを旅し、十月の末にキール大学に戻つた。キールには十一月の末までいて、ベルリンで新しい年一九二六（大正

一五）年を迎える。パリに戻つたのは、二月のはじめであつた。

ヨーロッパでの月日の経つのは早かつた。恭は在外研究期間を一年延長しようと思ひ立つ。当初は一年で沢山とまで考えていたのが、ヨーロッパに来てみると月日の経過は早く、二年の在外研究があつたという間に過ぎ去つてしまつたのである。が、留守宅のこともあつて、延長期間は半年ということになる。二人の子を抱え、留守を守る妻雅としては、夫には一日も早く帰つてもらいたかつたのである。恭は残された日々を利用し、六月の中旬には一人で、フランス各地の旅に出る。「学生生活の回顧」(完)には、次のようにある。

はじめ私は二ケ年間の在外研究を命ぜられた。日本を出発するときには、一ケ年でたくさんだと思つていたが、ヨーロッパに来てみると、案外に月日が早く経過してしまつたので、在外研究期間を一ケ年延長してもらいたいと考え、一度はその手続きをしたけれど、留守宅からの抗議に会して、延長期間を半年ということにしてもらった。それで、名残りを惜しむような心持ちで、六月のなかばに近いころから独りでフランス国内を一巡する旅行をした。リオンやケルノーブルを見物した後、プロヴァンスの山間のデーヌに一泊、ニースに出て、しばらくぶりに地中海の藍青の潮のいろを見た。その後はアンチープ、ジュアン・レ・パン、ツーロン、マルセイユ、エクス、アルル、アヴィエヨン、ニームなどをゆっくりと見てまわり、さらに中世風の都邑のすがたを保つていて有名なキャルキャツソンヌや、少女ベルナドットに奇蹟があらわれたゆかりの土地として巡礼の人々が夥しくおとずれるルールドヤ、ピレネー

の南麓の古都ポオなどを見物した後、ポルドーに出て大西洋の
にびい藍色の水のはてをながめた。それからはロアル河の流
域のあちこちの古城を見てまわった上、河口の港ナントからブ
ルターニユの地方を一巡して巴里にかえった。それはヨーロッ
パでの最後の旅であり、またいちばん楽しい旅でもあった。

留学生黄金時代だけのことはある。在留費のほかは国から国へ移
る場合は、移転旅費まで出たのである。文部省の留学生規定もゆる
やかで、金は出すが旅程を縛ることはなかった。恭のヨーロッパで
の研修は、大学で講義を受けた時間よりも、旅をしていた時間の方
が長い。ハイデルベルクやキールのような歴史と伝統を誇る大学に
正式の手続きをして入学しても、一人の教授につくでもなく、自由
に気の向くままにいろいろの講義を短期間聴講するに過ぎなかつ
た。これは留学時三十六歳という年齢ともかわっていた。三十代
後半の彼には、ことばの壁は厚かった。一高時代から彼はドイツ語
は得意であり、フランス語にまで関心を示し、はじめは暁星の夜学
で、後は独学で学んでいた。が、なにせ読み書き中心の語学である
から、ヨーロッパに来て当惑したのは、いたしかたないことであつ
た。彼は語学にすぐ見切りをつける。それでもバリ到着までもないこ
ろは、二人のフランス婦人から会話を学んでいる。日常会話はまだ
しも、講義や教会の説教などは、そう簡単に理解できるものではな
い。彼はそのことを、最初に籍を置いたハイデルベルク大学で痛感
させられた。

恭はヨーロッパでの研修を見学主体のものに切り換える。大学に
籍を置いて、授業はもっぱら見学であった。そこで学生と共に学

ぶとが、教授に教えを乞うとかいうのではなく、観察者としての立
場に立つのである。イギリスでオックスフォード大学やケンブリッ
ジ大学を訪ねたのも、本人自ら回想記でいうように「見物」であつ
た。あとは各地を旅し、美術館や資料館や遺跡を訪ねる。当時の文
部省の留学生規定はそれを保証した。彼は実に多くのヨーロッパの
国々と当地の名所を、この期間に訪問しているのである。それは大
学の講義を聴き、図書館に籠る以上に彼にとつては意味があつた。

一九二六（大正一五）年七月三十一日、恒藤恭はフランスのシエ
ルプールを発ち、ベレンガリア号に乗ってアメリカへ向かった。大
西洋を西へと進み、八月六日の朝、船はニューヨークに着く。林立
する高層建築の間から朝日の光が斜めにさしているのを、彼は上着
板から印象深く眺める。

八月中アメリカの各地を見物してまわった恒藤恭は、月末にサン
フランシスコから乗船、帰国の途につく。炎暑のアメリカ各地の旅
で、彼はだいが胃腸を痛めたという。横浜港に船が無事到着したの
は、この年の九月十六日のことである。二年半ぶりの日本であつた。
京都の自宅へ戻る途中に、鶴沼で静養中の旧友芥川龍之介を訪ね、
久しぶりに話し合っている。それが一高以来の友との永久の別れと
なった。その日旧友と別れ、「鶴沼の駅に向ふ車の上で、ふと、此
れきりでもう会へないのぢやないかしらと云ふやうな予感があたま
の中に閃いた」（『友人芥川の追憶』、『文藝春秋』一九二七・九）と恭は書
く。その予感は遺憾ながら的中することになる。（以下次号）